

「江戸庶民文化を知る」～浮世絵から見える江戸庶民の生活感情～

2018年12月14日（金）実施 JGA 第一支部研修終了レポート

12月14日（金）13:30～16:50、表参道の東京ウイメンズプラザに於いて、第一支部主催による「江戸庶民文化研修」が実施されました。 淑徳大学人文学部客員教授及び国際浮世絵学会常任理事としてご活躍されている小澤弘先生を講師にお迎えし、総勢44名（JGA 正会員31名、非会員9名、運営委員2名、協力者2名）が参加し、遠くは宮城県、滋賀県、山梨県、広島県からもご参加頂きました。

講義は13:30～14:35の約1時間は、浮世絵の今現在置かれている位置付けと「憂き世」が「浮世」と呼ばれるようになった経緯、当時の身分制度を起因とした人々の思いが「浮世絵」を描く原動力の一つであったこと等、「浮世絵」のルーツとも言うべき事情とその歴史や当時浮世絵師と言われた人が有名無名を含め役2,000人程いたこと、またその中には、同じ浮世絵師でも何度も名前を変えていること等の説明があり、当時の自由奔放な発想を垣間見ることが出来ました。そして、明治に近づくにつれ、海外の文化を受け入れるのに懸命であった日本では浮世絵は価値のないものとみなされたが、フランス人やアメリカ人にとっては逆にそうした自由な発想と大胆な構図でその時の日常生活の様子を瞬間的に描いた浮世絵は、人気が高まり、現在、日本の何十倍ものコレクションが海外の美術館や博物館にあり、日本人よりもむしろ海外のコレクターの方が浮世絵については詳しいこともあるとのことでした。

10分の休憩後、後半は有名、無名の浮世絵を一つ一つ取り上げて、そこに描かれた当時の時代背景、世相、流行や生活習慣、貨幣単位や当時の浮世絵一枚の値段が四文からあり（今の100円ショップの商品やコンビニのおでん1個に相当）、更には人気のお茶屋の看板娘の名前や人気の力士に至るまで詳しく丁寧にお話しされました。その中で、浮世絵の作成方法から描き方の特徴、例えば登場人物を男性からあえて女性に置き換える手法や故事を江戸時代に代えて描き、その故事が何であるかを考える楽しみ方や絵暦の読み方などの他、顔料の高級化に伴う鮮やかさの移り代わりや摺り方の違いによる表現の仕方〔雲母引き（きらびき）、板目摺り、ぼかし（グラデーション）〕についても触れられ、浮世絵について総括的に話しされました。

参加された方からは、「目から鱗」、「今までと違った浮世絵の世界をみる事が出来た。」とのご意見を頂き、大盛況のうちに終了することが出来ました。

